

アルナシームの引退に寄せて⑥

初めて 1400m戦に臨みましたが、結果的に距離不足だったこともあり、次走は短期放牧を挟んで芝 1800mの垂水ステークスへ。1400m→1800mへの距離延長のうえに、少頭数の外枠ということで、折り合い面の心配をしていましたが事実です。スタートを決めて、序盤は中団の外目を追走していましたが、向正面中ほどから抑えきれない感じで一気に先頭へ立ちます。東スポ杯のことが脳裏によぎったのは私だけではないはずです。しかも、少頭数ながら強豪揃いの 1 戰でした（実際に、2~4 着馬は後に重賞を勝ったり、いずれもバリバリのオープン馬として活躍）ので、「飲み込まれる！」と思いつながらヒヤヒヤしながら見守りました。継続騎乗してくれた坂井騎手の叱咤激励に応え、なんとかアタマ差凌いで優勝。これで晴れてオープン馬の仲間入りです。引っかかってしまったのかと思っていましたが、「スローで外を回らされるのが嫌だったので行かせました」と鞍上から力強いコメントがありました。さすがは坂井騎手です。肝が据わっています。それまでアルナシームが出走の際には、ほとんどのレースで競馬場に臨場していましたが、業務の都合上、当日は他場に臨場していました。そのため、モニター越しの応援でしたので、周りに配慮しながら観していましたが、「おめでとう。あの状況で声出ないの？冷静だねえ」と顔見知りの関係者から冗談交じりの祝福をいただきます。冷静と思ってもらえたのならこっちのものです。様々な方がおられる中で声を張り上げるのはどうかという考え方から、人がいる場所では極力出さないように心掛けてきたのですから。吠えたくても吠えない犬のように…。名手をして、「ノーコントロールだった…」と言わしめた暴走劇から約 1 年半、よくここまで来れたものだと胸が熱くなりました。他場でしたので、会員様をご案内する役割がなかった分、涙腺の緩みをこらえられず、お手洗いに駆け込み、「今日の勝因は自分が現地に行かなかつたからだな」と、勝手なことを思いながらハンカチで拭ったことを思い出します。



オープン馬としての初戦は初の 2000mとなる函館記念（G3）に決まりました。巴賞（芝 1800m）ではレース間隔が詰まってしまうこともあり、重賞への挑戦が決まりました。都合上、坂井騎手の継続騎乗が叶わないとため、再び鮫島克駿騎手での参戦です。当日は、私が臨場を担当することになり、函館記念には他にもユニコーンライオンが出走予定で、同日の新馬戦には期待馬がデビューする予定ということもありましたので、その日が近くにつれて高揚感が高まります。しかし、その週の前半にはセレクトセールに参加していたこともあるでしょうか、帰京後、高熱を出してしまい、病院に行ったところ、無情にもコロナ陽性の診断が…。もちろん、臨場することはできませんので、代役を依頼し、自宅で静養しながら観戦することになりました。

新馬戦以来の函館滞在ということもあったのか、画面越しにも状態の良さが伝わってきました。積極的なレー

ス運びで勝ちに行く競馬をしてもらいましたが、久しぶりの重賞挑戦は6着に終わります。結果は残念でしたが、差し、追い込み馬が台頭する展開でしたし、0.5秒差ということで決定的な差で敗れたわけではないので、前を向くことにしました。次走の候補には札幌記念も挙がりましたが、コンスタントに出走してきていることもあり、秋の番組表が公表されていない段階でしたが、初秋のレースに向けてリフレッシュを図ることになります。



秋季番組が発表され、秋の阪神開催で組まれている芝2000mのケフェウスステークス（OP）に向かうようになりました。前走の内容から、距離をこなせるとの判断でこのレースに照準を合わせることに。しかし、レースは意図したレースとはまったくならず、同じモーリス産駒同士で併走して競り合い暴走気味に…。前半1000mが57秒1というペースで直線は失速し、誰が悪いとか攻める気持ちではなく、アルナシームで一番見たくないと思っていたレースになってしまったことで、当時はやり場のない怒りを覚えました。今後に響かなければいいのだけれどと、このレースでの落胆に加え、懸念事項も生まれることになってしまったからです。状態は間違なく良かつただけに…。パドックで鼻歌を唄っているかのようなリズミカルかつ、五十嵐助手を引っ張る勢いで歩く姿と、レース後、どんな結果に終わっても、五十嵐助手が首をポンポンとして労いながら引き上げていく姿に癒され、いつも救われました。後ろから見ていると、「今日も頑張ったね」、「そうでしょ！今日も疲れたよ」と会話でもしているかのような雰囲気が好きでたまりませんでした。このレースを見てもわかるように、決して調整のしやすいタイプではなかったはずですが、常に毛ヅヤが良く、いつも良好なコンディションで送り出してくださっているのは本当にありがたいことでした。



次回に続く